埼玉県地域学校協働活動情報通信

CoLLABo コラボ

2024 Vol.2

特集　子ども大学訪問

～地域の教育力で子供たちに豊かな学びを～

特集　子ども大学

～地域の教育力で子供たちに豊かな学びを～

子ども大学は、二〇〇二年にドイツのチュービンゲン大学で始まりヨーロッパに広がった活動で、日本では、二〇〇九年三月に初めて埼玉県で「子ども大学かわごえ」が誕生した。

子ども大学では、大学のキャンパス等を会場に、大学教授や研究者、地域の専門家等が講師となって、子供たちの持つ素朴な「なぜ？」という疑問に答え、子供の知的好奇心を刺激する講義や体験活動が行われる。

●

埼玉県では、この取組をモデルとして、子供の学ぶ力や生きる力を育むとともに、地域で子供を育てる仕組みを創るため、子ども大学の開校を推進し、今年度は県内各地に五十一校の子ども大学が開校している。

子ども大学の運営は、NPOや自治体が運営主体となったり、大学や団体、自治体等が実行委員会を組織したりと「地域の教育力」を結集して行われている。

●

今回、令和六年七月二十三日に開催された「子ども大学みよし」の第二回講義「どうして猫のダヤンが生まれたの？」を訪問させていただいた。

子ども大学みよしは、今年で十回目の開校となる。三芳町在住の小学四年生から六年生までの子どもたちに地域をフィールドに、いつもと違う環境で、いつもと違う勉強を、いつもとは違う仲間と学ぶ、貴重な機会を提供している。

●

子ども大学みよし実行委員会の淑徳大学埼玉キャンパス在籍の学生に案内され、子供たちが会場に入ってきた。

子供たちは、絵本作家・池田あきこ氏による特別講義、猫のダヤンが主役の不思議な世界「わちふぃーるど」をモチーフにレザーグッズを作成

創作した作品を見せて説明する池田氏

猫のダヤンの絵本を熱心に読む子供たち

している（株）わちふぃーるど革工房を見学し、革製品のキーホルダーを作成した。

●

猫のダヤンは、池田あきこ氏が革工房のシンボルとして創作したキャラクターである。池田氏は、猫のダヤンを中心に不思議な国わちふぃーるどを舞台に絵本を書き始め、画集、長編物語、また旅のスケッチ紀行など多方面に作品を発表している。

猫のダヤンは、多くの人々に愛され続け、作年四十周年を迎えた。

参加児童からは、親子で猫のダヤンが大好きと語る子や講義開始までダヤンの絵本を熱心に読む子もいた。

●講義●

「絵本を創ることはイメージトレーニング。日常生活でも役にたつよ」と語り始める池田氏。子供たちにイメージを広げる大切さについて、絵本制作を通して話されていた。

●

池田氏が直営一号店自由が丘店のシンボルとして、猫のダヤンのポスターを作成した。その時お店に来た人々が猫のダヤンを見て「怖い」や「可愛い」など様々な反応をしたことで、池田氏の中で猫のダヤンが強い個性を持ったキャラクターとしてイメージが広がり、絵本の世界へとつながっていった。

●

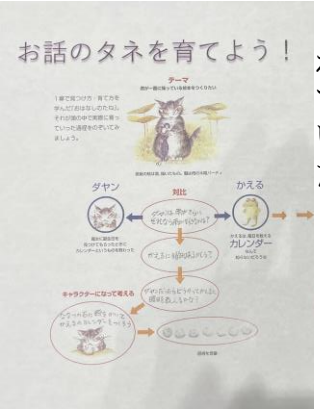
日常生活の中で「あれ」と疑問に思ったことやふと考えたことを膨らませていく「お話のタネを育てていく」ことが大切と池田氏は語る。

池田氏は、猫のダヤンの気持ちになって考えてみたり、雨でぬれるのが嫌いな猫と雨が好きなカエルやワニなど対比を用いてイメージを広げて絵本を創作している。子供たちにも別の視点を持って考えたり、逆の立場に立って考えることによりイメージを広げることが大切と話されていた。

また、興味あることは実際に見に行き絵本を創作している池田氏。子供たちにも実物を見たり触ったりするなど体験することの大切さを伝えていた。

●

講義後に子供たちから出た質問に、池田氏が笑顔で答えていく。「私は美術を習っていないので自己流。今も楽しくいろいろ挑戦して描いているよ。」と子供たちに挑戦への楽しさを話されていた。



講義配布資料より

特集　子ども大学訪問

傷の位置を確認するもなかなか見つけられない

工房のスタッフの説明を見て触って聞く子供たち

●工房見学●

わちふぃーるど工房では、キーホルダーやストラップなどを作成している小物班や出来上がった製品を検品する検品班など、作業ごとに細かく班分けして作業が行われている。

●

子供たちは、作業をのぞきこんで見たり、工房の方に質問をするなど興味津々で見学していた。

検品の際に不良品となった製品を見ても不良個所が見つけられない子供たち。細かな傷など厳しくチェックしていることを知るとともに、革製品が全て手作業で一つひとつ丁寧に作られている作業を見て、子供たちは自分たちの手元に届くまでに多くの人が愛情を持って製品に携わっていることに驚き感動していた。

●ワークショップ●

子供たちは実際に工房で使われている機械を使いながら革製品のキーホルダーを制作した。二枚の革を張り合わせ圧着した後、型抜きをして高温高圧のプレスで凹凸を付けて、革に立体的な表情を与え形を決める。

四角い革布が次第に製品になっていく。子供たちは実際に出来上がる過程を体験することで、革製品への愛着を増していった。

●

帰り際、迎えにきていた保護者に誇らしげに革のキーホルダーを見せる子供たち。

地域をフィールドに、地域と繋がり、地域とともに子供たちを育む「子ども大学みよし」。参加した子供たちは作成したキーホルダーをいつまでも大切にするだろう。

箔押し機で革の表面に刻印を転写

ダヤンの革のキーホルダーが完成

埼玉県地域学校協働活動推進セミナー開催

学校と地域の連携・協働
～子どもたちの未来のために、今私たち大人にできること～

地域学校協働活動推進セミナーとは

埼玉県では、地域全体で未来を担う子どもたちの成長を支え、地域を創生する活動の推進に向け、地域学校協働活動の理解促進と中核を担う人材の育成を目的に、「地域学校協働活動推進セミナー」を開催している。

令和六年度　埼玉県地域学校協働活動推進セミナー開催

今回は、四柳千夏子氏を講師にお招きして、八月九日（金）に開催された地域学校協働活動推進セミナーの様子を紹介する。

四柳千夏子氏は、三鷹市統括スクール・コミュニティ推進員であり、文部科学省のＣＳマイスターである。

今セミナーでは「学校と地域の連携・協働～子どもたちの未来のために、今私たち大人にできること～」をテーマに、学校と地域の連携・協働について話し合うこと、すなわち「**熟議**」の重要性という観点からお話をいただき、その後、実際に熟議を体験するワークショップを行った。

セミナーの参加者は、地域学校協働活動推進員や学校運営協議会委員、小学校の校長、市町村職員など、様々な立場の方で、およそ五十名が参加した。参加者は、異なる立場の者同士が四、五人のグループとなるように分けられ、グループごとに受講した。同じ目的を有する多様な活動の主体同士が交流を深めることで、「**学校を核とした地域づくり**」に一役買うことが期待される。

講義は、グループ内での自己紹介から始まった。名前・どこから来たか・どのような活動をしているか・夏の埼玉といえば何か、という観点からどのグループも終始にぎやかな雰囲気で、思い思いに交流を深めた。

五分間の自己紹介が終わった後、四柳氏から、始める前に「五分間で行います。一人一分程度で話してください。」と指示を出したこと、終了一分前のアナウンスをし、「まだ話していない人は話してください。」と呼びかけたことが、この後話す「熟議」でも重要なのだというお話があった。

地域学校協働活動
ＮＥＷＳ

コミュニティ・スクールとは何か

国が定義している「コミュニティ・スクール（ＣＳ）」とは「**学校運営協議会**を設置している学校」である。

地域の人々は教育のプロではない。しかし、地域の力として子どもたちを褒めたり励ましたりすることはできる、と四柳氏は語る。これからの教育課程の理念は、「よりよい学校教育を通じてより良い社会を創る」という目標を学校と社会とが「**共有**」することにある。

地域に「今ある」強みや魅力を最大限に生かす

地域の力を最大限に活用して、「社会に開かれた教育課程」を実現するカギは、学校のニーズと地域の強み・魅力とのマッチングである。そこでは“つなげる人”がキーパーソンとなる。それが**コーディネーター（地域学校協働活動推進員）**である。

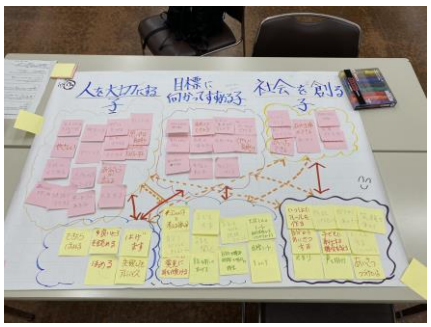
支援から協働へ

これからの学校と地域は**パートナー**として互いの立場を理解し、目標を共有していかなければならない。

学校と地域が連携・協働してできること

学校での防災授業と地域主催の防災訓練を結び付け、中学生とともに防災について考える、という取り組みが講義の中で取り上げられた。学校が果たすべき地域防災拠点としての機能について学校と地域で情報を共有したり、地域主催の防災訓練に中学生が参加することで、訓練内容が活性化したりするなどの効果に加え、子どもたちが地域の人から物事を学んだり、学んだことをやってみせることで自己有用感を感じるといった効果もあることが紹介された。

異動等で教師が変わっても、地域がこのような取り組みの効果を理解しているから、取り組みが続いている。ＣＳの良さとは、「方法は変わってもやっていることの根幹は変わらない」ということなのだ。



参加者は相槌を打ったり、メモを取ったりしながら熱心に四柳氏のお話を聞いていた。子どもたちに、より良い学びを提供したい、という四柳氏の熱意が感じられる講演だった。

地域学校協働活動
ＮＥＷＳ

熟議の重要性

話し合いの質を高めるために、「**熟議**」をすることが求められる。熟議は、多様な大人が話し合う場において非常に重要であり、有用である。四柳氏が熟議を勧める理由は、「話し合いに参加している全員が同じように意見を出せるようにする」、「強い人の意見に流されないようにする」、「話し合った記録を残す」の三つである。

熟議では、「話し合いの約束事（ルール）を作る」、「終わりの時間を決め、限られた時間をどのように使うのか話し合う」などの準備が重要である。

ワークショップ

セミナーの後半では、グループごとに熟議を実践した。話し合う内容は、「どんな子どもたちに育ってほしいか」「そのためにやっていること・できていること・あなたは何ができそうか」の二点である。熟議は、役割を決める→付箋に個人の意見を書いていく→順番に全員が付箋を出し合い、互いに質問したり意見交換をしたりして意見を深めていく→話し合いながら付箋を分類する→模造紙をまとめる、というプロセスで進んでいく。

参加者は、一斉に役割を決めたり、時間配分を相談したりし、熟議を始めていった。どのグループでも活気のある意見交換がなされ、終始楽しそうな笑い声が響く和やかな雰囲気で行われていた。

熟議終了後、いくつかのグループが話し合った内容を発表した。「挨拶が何より重要なのではないか」「人間力が高い子どもになってほしい」など、各グループの個性あふれる模造紙と共に発表がなされた。多様な意見が出されたが、どの意見も行き着く先は同じであり、「子どもたちに豊かな学びを届けたい」という共通の視点を持った者同士、立場は違くとも、目標は共有されている、ということが再確認されたのではないか。

熟議をした後、忘れてはならないことは、**振り返り**をすることと、話しっぱなしにしないことだ。大切なのは「**何のために**」。対話を重ねて「**地域と共にある良い学校**」を協力して創っていきたい。

参加者の声

持続可能な取り組みを地域と共に行うという考えを持つことができました。（教職員）

熟議を通して初めましてから、最後には、前から知り合いだったかのような仲間になれた。（放課後子供教室関係者・民生児童委員）

思いや願い、話し合いのゴール地点が共有できていれば、経験や立場が異なる他者同士、違う意見が出ても話し合いは成立する、話し合いの成果や達成感が共有できる。（行政関係者）

学校・家庭・地域などネットワークを生かし、つながることで、より実践的で有効な子どもの健全な育ちに結びつくことを強く感じたので、つなげる役割を担えるように力をつけていきたいと思いました。（学校教育アドバイザー）

地域学校協働活動
ＮＥＷＳ

埼玉県地域学校協働活動推進セミナー
令和６年７月２９日（月）オンライン開催

講師
鈴木　廣志　氏
文部科学省ＣＳマイスター
栃木県栃木市地域政策課
社会教育指導員

演題
学校と地域で創る学びの未来
～地域コーディネーターの活躍を通して～

概要
- コロナ後の学校・家庭・地域の現状
- コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進
  - ・学校運営協議会の熟議とは
  - ・全国の地域学校協働活動の紹介
- 栃木市での地域学校協働活動の新たな実践

事例発表者
市川　重彦　氏
所沢市立松井小学校長

事例タイトル
地域全体で子供たちの学びや成長を支える地域と学校の“連携・協働”

概要
- 学校運営協議会導入の経緯
- 学校運営協議会における熟議の展開・熟議の具現化
- 多様な主体の連携による地域学校協働活動の充実
- 学校運営協議会制度の導入における成果と課題

参加者の声

地域学校協働活動の目的は学校のグランドデザインの実現にあり、それに基づく活動であるべきという点。目的を見失うことなく具体的な活動につなげることの大切さを感じた。
（行政関係者）

新しいことを始めるのを目的にするのではなく、持続可能・継続できる仕組みをつくっていくこと、学校・地域・行政がそれぞれの立場で当事者意識をもって関わりを強めていくことが重要であると感じた。（教職員）

熟議することで課題が見つかり、取り組むべき内容が明確化する。コミュニティ・スクールは様々な課題解決の可能性を秘めているプラットフォームとのお話が印象的だった。（教職員）

活動に当たっては、同じ目的を共有することがとても大事だと改めて感じた。子供たちには、自分が通う学校で「様々な体験をする機会が増える」と感じてもらえたら嬉しいと思った。（学校運営協議会委員）

松井小学校は、定期的に集まり話す場があること。課題の洗い出しを明確にしていること。課題を熟議し、改善のための具体的な行動に移しているところ。地域の結びつきの強さも素晴らしい。（地域学校協働活動推進員）

発行元：埼玉県教育局教育総務部生涯学習推進課　　令和6年9月発行
電話：048-830-6979　E-mail：a6975-05@pref.saitama.lg.jp(ご意見、ご感想はこちらまで)